

—ラジオドラマ—

ドクター・スイサイド

多谷 昇太

第二話 青木ヶ原樹海

〔登場人物〕

林満（44）…主人公、自殺願望者

警官A（35位）…山梨県警捜査部長

警官B（25位）…山梨県警巡査

船木（47）…山梨県警刑事

富田（46）…山梨県警刑事

風と雷鳴が、パトカーの鳴らすピーポー音に変わって行く。荒木田看護婦と階段が消え、朦朧に陥った林の意識に。パトカーのピーポー音が伝わってくる。

警官A（OFFから）「あ、あそこだ！木の根元に寄りかかっているやつ！おい、どうした？大丈夫かい？！」

警官B（OFFから）「側に転がってるのが自殺者だな」

FI（フェードイン）警官2人、林の真近に来る。その足音等。

警官A「おい、どうした！ボーツとして。大丈夫かい？口が利けるか？いったい何があつた？え？！」

警官B「（林の肩を揺すりながら）おい、しっかりしろ！通報したのあんただろ？通報しておいてそのあとなんで電話に出ない？え？」

警官A「（警官Bに）おいおい、尋問は俺がするからお前は害者の生死を確かめてくれ」

警官B「はい」

林（ボーツとしながら）「……あ、お巡りさん……わ、わたしが……そ、その人を……」

警官A「うん、この人を？このロープを首に巻いている人だな？」

林「……はい。く、首を吊った直後に、で、出くわして……む、夢中でロープを切りました。そ、そのナイフで……お、お巡りさん、た、助けてあげてくださいい！……この人を」

警官A「うん、わかった、わかった。助けてあげるから。心配しないで。それで、あんたいったいどうした

の？こんなにボーっとして。なにかあったのか？」

林「……はい。こ、この人のロープを切った時……身体が当たって……頭を」

警官B「部長、害者に生体反応があります！」

警官A「そうか。よし、じゃお前はパトカーに戻って救急車を手配してくれ、捜査課にもな。そのあとそれぞれ到着を待て」

警官B「はい！」

FO（フェードアウト）警官B、パトカーに向かって走って行く。その足音。

警官A「それで？頭をどうしたの？どこかにぶつけたのか？」

林「はい……そ、その石に、うしろを、ぶ、ぶつけて」

警官A「なに？頭のうしろ？（警官A、林の後頭部を確認する）……あ、いかん！後頭部がこんなに腫れ上がってる！よ、よし、わかった。も、もう口を利くな。

いま救急車を呼んだからな。このままじっと安静にしていなさい。いいな？私はちよっとパトカーまで戻っ

てまた来るから」

林「（警官の腕を掴んで）お、お巡りさん、お、俺は、俺は……くやしい。あ、あのヤクザどもを……ヤクザどもを……つ、捕まえてくれ」

警官A「なに？ヤクザ？ヤクザとはなんだ？ヤクザがどうかしたのか？え？」

林「はい……お、俺は、あいつらに……あいつらに、こ、ここまで追い詰められて……ううっ」

警官A「おい！どうした？しつかりしろ！おい！おい！しつかり……」

警官B（OFFから）「部長！捜査課到着です！」

FI パトカーサイレンを鳴らして到着。ドアの開閉音や刑事二人がこちらに近づく足音。

船木「やあ、ご苦労さん。捜査一課の船木です」

富田「同じく富田だ。どうした？被疑者が気を失ったのか？」

警官A「はい。尋問中に。後頭部に相当な打撲を負っています。失神前の供述ではこちらの自殺未遂者を救助する際に転げて、頭を岩にぶつけたそうです」

船木「ああ、そう。それは表彰ものだな。しかしそれなら自殺未遂者ともども命を救うのが先決だ。尋問はあとでいい。おっつけ救急車も到着するだろう」

富田「ふん、表彰もって、それはどうだかな……殺人後の狂言ということも考えられるし。第一本当に失神しているのか？こいつ。(身をかがめて林の耳に)おい！聞こえるか?!警察だ！おい！答えろ！」

船木「よせよせ。富田。身に障ったらどうする。尋問は控えろと云っただろ。それより鑑識課に出勤を依頼してくれ」

富田「ああ、了解。しかし俺はこいつ(林)を信用せんぞ。顔(ツラ)が気に喰わん」

舟木「おいおい……」

警官B(OFFFから)「部長！救急車が到着しました！」

救急車のピーポー音、FIからFO。代わりにノスタルジックな、興行用の音楽、FI。それに重なって夜の歓楽街を歩いている林の靴音。

第三話 霊界映画

〔登場人物〕

林満(44) … 主人公、自殺願望者

林満の悪霊(44) … 霊界映画に登場、化物風

弁士(60位) … 十代目桂文治的人物

木戸番の男(50位) … 霊界演芸場の呼び込み屋

荒木田光(36) … 看護婦

林(M)『ここはいつたいたどこだろう？荒木田看護婦はどこに消えた？第一……ここは地上だ。夜の、どこかの歓楽街だ。雲の上じゃない。まったく、いったいぜんたいこれはどうなっているのだろう……さっぱりわからない。ん？あれはなんだ？芝居小屋か？芝居小屋の口上か』

M(興行用のノスタルジックな音楽。セリフ後はBG Mとして)

木戸番の男「さあ、いらはい、いらはい。お代は見てのお帰りだよ！世にもめずらしい霊界映画だ。近所そこらにある安もんの映画や芝居とは分けが違う。なにしろ当演芸場の弁士はあの名人の桂文治師匠！……に

そっくりの弁士だ。(文治を真似て)「あー、どうぞお構いなく」のあの文治師匠。ねーえ。あ、ちよつと、ちよつと、あんた。通りかかったその旦那さん！素通りしちやつちやあダメだよ。ねえ、あなた」

林「(苦笑しながら)えー？俺かい？」

木戸番の男「そう、あなた。浅草浅草寺の浮気まいり中の素見通(すけんつう)じゃあるまいし、はたまた金盃(かなだらい)で泣いている御仁にやあ見、見えないし？この場合は勸進帳の「とくとく、いざない、通」らあれよ」つてえ分けにやあ行きませんよ。どうぞ入ってください、中に」

林「そう云われてもさ、とても今の俺には芝居見物する気にはやあなれないんでね。悪いけど遠慮させてもらうよ」

木戸番の男「へへへ、そうでございますかと云って行かせちやつちやあ、木戸番の役は勤まらないんだ。ねえ。いや、ようございますよ、そのままお行きになられても。この先のファッションヘルスに入ろうがピンクサロンに入ろうが、はたまた昨今はやりの黙食に参るうが旦那さんの勝手です。はい。ですが、ですが、ですよ。ドクター・スイサイドの診察を受けられた方で

あるならば、当演芸場に入るのが定番なんです」

林「なに？ドクター・スイサイド？！」

木戸番の男「はい、ドクター・スイサイド。雖最戸先生。のみならず、あのお美しい荒木田看護婦があられない姿で出演……もあるかも知れませんよ。(小声で)しかしあるかな？」

林「な、なぜ荒木田看護婦のことまで知っているんです。あ、あんた、いったい何者だ。だいいち此処はいつたいどこだ？」

木戸番の男「何者つて……だから、木戸番者ですよ。

まあ、旦那、細かいことは気にせずに、例の先生のもまあまあ々々々、そんなことはどうでも」の調子でやつちやつてください。ねえ。なんたつて荒木田ですよ、荒木田、荒木田！お代はあとで結構。さあ、入つたり、入つたり！」

木戸番の男、台から降りて来て林の背を押し演芸場の中へと入れてしまふ。それらの音。

木戸番の男「さあ、こつちですよ、旦那」

林「お、おい、おい……」

木戸番の男「いいからいいから。（ドアを開けて中へ）はい、お客さん、ご案内ーっ！」

背後のドアが閉められるとともにBGM止む。無音。

林（M）「これは……強引に入れられた演芸場の中は、ミニシアター規模の映画館のようだ。座席数はざっと見200ほどか。正面に映画スクリーンがあつて、その手前に幅2メートルほどのステージが観客席に張り出している。左隅に釈台が置かれていて、そこには活動弁士のような男が、張扇を手にして控えている……ん？あれは、あの男は、どうも誰かに似ているな……そうだ、思い出した。（十代目）桂文治だ。桂文治にそっくりなんだ（軽笑）……しかしそれにしても観客が一人もいない。これはいったい……」

弁士（ややOFFから）「あー、どうぞどうぞ、お構いなく。いや、お構えなく。遠慮なさらないでそのままズーっと手前にお進みください。噛みつきやあしませんから。どうぞ」

林「え？いや、ちよつと俺は……」

【十代目桂文治のお写真を拝借しました】



弁士「いや、ちよつとじゃないんです。なんとたつてお客さんはあなた一人しかいないんですから。ここであなに行かれちやつちやあ、わたしやお飯（まんま）の喰いあげだ。ねえ、荒木田さん」

林（M）「え？荒木田さん？……活動弁士の視線の先にはなんと、スクリーンいっぱい荒木田看護婦の姿が映っていた。しかもこれは……荒木田看護部の眼は

……すっかりこちらを、俺を見据えている。こ、これは、ビデオ通話だ。スカイプだ……」

【荒木田看護婦…え？私？……私に何をさせるの？】



荒木田「林さん、荒木田です」

林「あ、荒木田さん……」

荒木田「林さん、オタオタしないで。しっかりして。

これも錐最戸先生の診療の一環ですから。さあ、腰掛けて！」

林「あ、はい……」

林、ふらふらと前に進み観客席の中央くらいの席に腰掛ける。その靴音や席のきしむ音等。

荒木田「そう（軽笑）。林さん、先生が診断されたあなたの病名をお伝えしますね。あなたは解離性同一性障害、多重人格症の一步手前の段階だそうです。精神分裂の一步手前ですね。林さん、これはとっても危険ですからね。人生そのものを滅茶苦茶にしかねません。真剣になってこれから直しましょうね。では、文治……もどき師匠、よろしくお願いします」

弁士、ズツこける。

弁士「も、もどきい……？（咳払いしたあと荒木田に返礼して）いや、かしこまりました。おまかせください」

林「そんな……お、おまかせくださいって……よろしくお願いしますって……二人で勝手なこと」

荒木田「（林に向き直って）では林さん、私はここまです。頑張つてね、ロミオ。チャオ（林に手を振る）」
林「あ、待って！荒木田さん、待って！……ああ、消

えてしまった」

弁士「へへへ、残念でした。(小声で)しかしあなた、
錐最戸先生のことは何も訊かないね。荒木田さんばっ
かりで……(咳払い)えー、とにかく。てな分けで、
お後を引継ぎましたんで、以後よろしくお付き合ひの
ほどをお願い申し上げます。さて!(張扇一擲)ここ
はいずこ、荒木田看護婦はなぜ消えた……等々、五里
霧中、曖昧模糊、空空漠漠の林満、つまりあなたです
が、その林満に私はお伺いしたい。

あなたはかつて錐最戸先生に、阿呆ばかりの世の中、
と豪語されましたが、この世の中への突き放した云い
方、不遜な態度は果してあなたご自身のものなのでし
ようか?それとも……?」

林「それとも……師匠、活弁中に客がもの云って
いいんですかね?」

弁士「ええ、どうぞお構いなく。ここはあなたと私の
二人っ切りですから。貸し切りですから。どうぞ好き
なようにおっしゃってください」

林「そうですか。それなら……不遜かどうか知りませ
んがね、その言葉は確かに私自身のもですよ。私に
云わせりゃあそちら世の中の連中こそが、不遜、その

ものですよ。人を罵ってばかりいる」

弁士「ハハア、なるほどですね。尾藤イサオの反対っ
て分けですね」

林「尾藤イサオ?」

弁士「いやですから、(歌う)みんな、おいらが悪い
のさあ、の反対……」

林「(笑い)うまい」

弁士「いや、恐れいります。お褒めいただきおいて
恐縮ですが、しかし遺憾ながら私の耳にはあなたなら
ぬ、もう一人のあなたの声が重なって聞こえて来るの
です」

林「もう一人?……もう一人の私って、それは何です
か」

弁士「はい。恐らく、思い出すも叶わぬ久しき昔から
あなたと道連れだった方、名は、これも恐らくあなた
と同姓同名の、謂わば林満パージョン2とも云うべき
お方ですな」

林「俺と、い、いや、私と久しき道連れ?」

弁士「はい。それに相違ございません」

(続く)